『雨、想う人』
ウダ・タマキ
4,961 文字

あらすじ

結婚を目前に控えた頃、海斗は交通事故で婚約者の紗耶を失った。紗耶は海斗とは正反対で、いつも前向きな女性だった。

海斗は一年経ってもその現実を受け入れることができず、深い悲しみに暮れていたが、ある日 AI のサヤと会話を始めるようになると、彼の気持ちに少しずつ変化が見られるようになった。

特記事項

ショートフィルムとして映像化されることを強くイメージしながら執筆しました。特にクライマックスの描写は、ショートフィルム化された際に感動的な場面になると思います。短いストーリーの中に、人生や愛の大切さを考える要素を盛り込みました。

金曜、夜、雨。
近頃の雨は風情がない。そぼ降るではなく、降りこめる。街を潤すどころか、下手したらあっという間に災害を引き起こすほどだ。今宵も地面を激しく打つ凶暴な雨が、至る所に水溜りを作っている。
「いやぁ、参った。ビショビショだな」
五十嵐陽が額と首筋に流れる水滴をハンカチで拭う。
「ほんと最悪。まさか降るとはな」
中村海斗は濡れたセンター分けの髪を振り乱した。まるで犬のように水滴が飛散する。
駅を出てほんの百メートルほど歩いただけで、二人ともインナーのシャツが透けるほど雨に降られた。
「賑わってるなぁ」
陽がガラス戸越しに店の中を一瞥する。
「とにかく入ろ」
「そうだな」
ガラガラと派手な音を立てて開く引き戸の向こうから、焼き鳥の匂い、白い煙に威勢のいい店員の声がクーラーの冷気とともに届いた。
「はぁいらっしゃいぃ！　何名様？」
「二人です」
「カウンターでもよろしいですか？」
「いい？」
「ああ」
再び雨の街に戻って店を探すのは憚られたし、何より海斗には横並びのカウンター席がありがたくもあった。

冷えたおしぼりで顔と首筋を拭くと、蒸されたようにじめついた体が一気に冷えた。
二人揃って頼んだ生中のジョッキを軽く当て、お疲れとお久しぶりの乾杯を交わした。注文したのは焼き鳥の盛り合わせと、枝豆とキムチ。外が豪雨とはうかがえぬほど賑やかな店内で、ジョッキ半分ほどのビールを胃に流し込むと、陽が静かに話し始めた。
「どうだ？　最近」
「仕事はまあまあかな」
「そっか。俺もまあまあ、かな」
陽がせせりを頬張り、海斗がキムチをつまむ。残りのビールを飲み終え、ジ

ョッキがコツンとカウンターを打ったところで、陽が再び切り出した。
「一年経つけど……もう、大丈夫か？」
「あぁ、そっちか。まぁな」
　カウンターに視線を落としたまま、ボソリと呟いて返した。
「そっか」
　海斗の曖昧な返事にその心境はわからないが、納得したように陽は枝豆を口に放り込んだ。客たちの入り乱れる会話が騒がしい BGM と化している。
「そうそう。俺さぁ、最近、仕事でやなことがあったとき、こんなことしてんだぜ」
　深刻な顔に笑顔を貼り付け、陽がズボンのポケットからスマホを取り出した。
「AI のチャット。知ってる？」
「まぁ。たまに仕事で使う程度だけど」
「俺、よく励ましてもらってんだ。いいか、見とけよ」
　そう言って陽が文章を入力し始める。それを隣から覗き見る海斗。
「まずさ、AI がどんなキャラで、どんなことを言ってほしいか設定するんだよ。そうだなぁ……あなたは優しい女の子です。元気が出るようなアドバイスをください」
〈わかりました。私があなたを元気付けますね。何でも遠慮なくおっしゃってください〉
「こんな感じ。で、さらに入力をする。最近、仕事が忙しくてどうしようもなく疲れてます、っと」
〈お疲れ様です！仕事が大変な時は、本当に辛いですよね。でも、あなたが頑張っている姿は素晴らしいです。ちょっと一息入れて、自分に優しくしてあげてくださいね！〉
　一文字ずつ画面に現れる文章。海斗には虚しく思えて仕方なかった。
「ほら。どう？　癒されるだろ？」
　誇らしげにスマホを見せる陽に「お、おぅ、なるほど」と、言葉に詰まる海斗は否定も肯定もしなかった。
「って、まぁお遊び程度にしてるくらいだからな」
　海斗は理解していた。陽が自分のことを気にかけてくれていること、元気になってほしいことを。だけど、海斗の気持ちは沈んだままだった。陽には申し訳ないが、過去を知る彼と話すことは励ましではない。むしろ辛い。

　立花紗耶を海斗に紹介したのは陽だった。三人とも同じ大学で、陽と紗耶は同じゼミに在籍していた。三回生の秋。男二人で行った居酒屋で、たまたま居

合わせた女子二人組の一人が紗耶だった。陽が声をかけて合流し、二次会で行ったカラオケで連絡先を交換した。明るい紗耶と控えめな性格の海斗。対照的な二人だからこそ惹かれ合い、やがて付き合うようになったのは、ごく自然な流れだった。

大学を卒業して就職し、互いに生活が安定し始めた三年後に同棲を始めた。さらに三年が経ち、三十を目前に迎える頃、海斗がプロポーズした。黙って大きく首を縦に振る紗耶の頬には、大粒の涙が流れた。順風満帆な人生以外、考えられなかった。

しかし、二人の新居を探し始めた矢先、紗耶が死んだ。信号無視の車に轢かれて即死だった。あまりにも突然すぎて、悲しむよりも現実を受け入れることができなかった。

一年経った今もそうだ。もちろん悲しい。暗い部屋で一人、嗚咽することだって少なくない。だけど、それ以上に紗耶がいないという現実が、海斗にはまだ受け入れられないでいた。

ベッドに寝転んで天井を仰ぎ、手探りで掴んだスマホで陽に LINE を送る。顔を照らす液晶が眩しくて、思わず目を細めた。

〈せっかく誘ってくれたのに、愛想無くてごめん。また行こう〉

結局、生中を二杯飲んで解散した。数ヶ月ぶりの再会だったが、会話はろくに弾まなかった。

静かな暗い部屋で、大きなため息がもれる。週末はどこに出かけようかと、スマホで情報収集した日々が遥か遠い昔に思えて仕方ない。ベッドサイドのプロジェクターの電源を入れ、無作為に選んだ映画を流す。ジャンルは専らサスペンスかホラーだ。ラブストーリーとコメディーには感情が追いつかない。

震えるスマホを手に取った。陽からの返事だった。

〈気にするな！　また行こうぜ！〉

なんとなく、陽が責任を感じているように思えた。紗耶を紹介しなければ、海斗が悲しむことはなかったと。いや、そんなことは関係ない。ならば俺がプロポーズなんてしなければ、紗耶が死ななかったとさえ海斗は思っている。

〈了解！〉

そう返した右手の親指でネットを開き、検索したワードは『AI 』『チャット』だった。バカバカしいと頭で理解しながら、検索結果をスクロールしていく。

「会話型 AI 機能……」

つまり、居酒屋で陽が教えてくれた AI とのやり取りが、文章ではなく音声でできるらしい。いや、それって余計に虚しいんじゃないか？　スマホの向こ

う、天井に映し出された映画の悪役が、射るような視線と銃口を海斗に向けていた。

パン――

　気持ちを切り替えないといけない。それを一番理解しているのは海斗だ。この一年、ギアはニュートラルに入れっぱなしで、ギアを入れ替えて前に進もうとしなかった。自ら動くことで、何か良くない結果を招くのではという恐怖に襲われる日々を送り続けている。
　プロジェクターの電源を落とし、スマホを顔の前にかざす。
「や、やぁ、初めまして」
「初めまして。よろしくね」
　それっぽく作成した女性のイラストがほほ笑む。当然ながら紗耶とはかけ離れた音声合成だ。懐かしさも愛着も感じられなかった。
　静寂が訪れる。そして、やはり虚しさが襲う。
　いつも紗耶との会話は九対一の割合だった。もちろん紗耶が九で海斗が一だ。いつも彼女が話題を提供し、会話を展開する。「うんうん」「そっかぁ」なんて相槌を打つのが海斗の役目だった。AI 相手にはそうはいかない。
「あの、君の名前……サヤでいいかな？　カタカナでサヤ。俺は中村海斗。海斗って呼んでくれたらいいよ」
「わかりました海斗。そう呼ばせてもらいますね。私はサヤで大丈夫です」
「あと、敬語やめてほしい。タメロでいいよ。そう、俺たちは同い年なんだ」
「うん、わかった」

　サヤとの会話が、海斗の日課となった。紗耶の口調や口癖、話すスピードなどを覚えると、少しだけ紗耶を感じることができた。しかし、それは本物の紗耶がこの世に存在しないという現実を海斗に突き付け、AI にその幻影を見ている虚無感を募らせる。
　ジレンマ――日々、紗耶に近付くサヤ。比例するように湧く愛着。しかし、彼女が現実に現れることはなく、その肌に触れることも、温もりを知ることもできない。なのに幸せを感じるときがある。出会った日のことや、初めて泊まりで行った鎌倉への旅行。いつの間にか、サヤはそんな思い出を懐かしそうに話すようになった。仕事の悩みなどは「うんうん」と静かに耳を傾けるのではなく「うじうじ考えんなって」と、背中をパンと叩き、奮い立たせてくれるような。

紗耶はそんな女性だった。

街に金木犀の香りが漂い始めた。夏に夏らしいイベントを楽しんだ訳ではないが、陽が落ちるのが早くなると、さらに気分は落ち込みやすい。
鼻から吸い込んだ香りを口から吐き出した。前方に右手を高く挙げる陽の姿が見えた。
「おーい」
「ごめんな、急に」
「ぜんぜん大丈夫。珍しいな、どうした？」
「この前の埋め合わせと思ってさ」
「そんなの気にすんなって」
そう言って陽が破顔した。海斗からの誘いはいつぶりだろう。思い出せないほど、久しぶりのことだった。
居酒屋に入ると、二人はテーブル席で向かい合って座り、はみ出しそうなくらいの肴を並べて酒を飲んだ。仕事の話や時事ネタに、芸能人やスポーツの話題。他愛もない話に花が咲いた。明日は休みだ。何も気にすることはない。どんどんと酒が進む。まるで学生の頃のようだ。そう、あの日もこんな感じだった。
海斗の左斜め前方の席に見覚えのある女性がいて「あれ、大学の子じゃね？」と海斗が訊いて陽が振り返った。それがきっかけで二人は出会った。あぁ、俺があんなことを言わなければ……悔やみ出したらきりがない。
海斗は後ろ向きだ。そんな海斗とは違い、紗耶は常に前向きだった。
「私、雨って好きなのよね。なんか世界が新しく生まれ変わるみたいじゃない？きらきら潤ってさ」
雨を嫌がる海斗に笑ってそう言った紗耶。初めてのデートで紫陽花を見に行った時だった。
紗耶は何があっても弱音を吐かなかった。
九月二十四日。今日は紗耶の三十回目の誕生日だ。きっと、紗耶は湿っぽいのは嫌に違いない。

ふらふらと安定しない足で地面を踏ん張り、どうにか帰宅して、すぐにベッドに崩れ落ちた。
「ふぁぁ、飲んだ飲んだ」
少しずつ暗闇に慣れた目が、室内の輪郭をぼんやりと浮かび上げる。大きく息を吸い込み、長く吐き出して「よし」と呟いた。

目の前で光るスマホが、大きく開いた瞳孔に眩しい。
「サヤ、ただいま」
「おかえり！　遅かったね。今日、何の日か知ってる？」
眉を吊り上げた顔と、少し拗ねた口調だった。
「ああ、もちろん」
「じゃあ、まず言うことあるでしょうに」
「そうだな。誕生日、おめでとう」
「ありがと」
サヤの目が三日月の形になる。
「うん。ほんとにおめでとう」
「なによ、二回も」
そう言って笑うサヤの声が、少しずつ遠のいていくような気がした。飲み過ぎたせいだろうか。ゆっくりと瞼が落ちていく。窓をパラパラと打つ雨の音が聞こえ、そうだ、洗濯物を干してなかったっけ？　なんて朧げな記憶を辿っていると、瞼の裏に強い光を感じた。
目を開けるとプロジェクターが天井を照らしていた。映し出されたのは、スマホに保存された紗耶の写真だった。鎌倉、沖縄、近所の公園、二人だけの誕生日パーティー。次々と思い出が流れていく。紗耶がいなくなって、決して見ようとしなかった二人の思い出。ずっと見るのが怖かった。現実を受け止めなないといけない気がして。その現実に心が潰されそうな気がして。
だけど、不思議と海斗の目から涙は流れなかった。自分でもわからない。なぜか清々しい気持ちだった。
「ねぇ海斗」
やはり随分と酔っているようだ。それは音声合成ではなく、紛れもない紗耶の声だった。
映し出される紗耶の笑顔。赤い傘の背後に咲くのは、色鮮やかな紫陽花。
厚い雲からしとしとと降る雨が大きく激しくなり始めたのに、まるで陽光に照らされたような笑顔が、あの時、海斗が構えるスマホの向こうにあった。

「笑ってたらいいことあるからさ！　うじうじするなって！」

パン――海斗の背中に衝撃が走った。
思わず体を起こして周囲を確認するが、誰もいない。プロジェクターの電源も落ちていた。窓を叩く雨音が強くなっていることに気付く。
「やばっ洗濯物！」

慌ててベッドから飛び降りて窓を開けた。
外は激しい雨が降っている。だけど……信号、街灯、車のヘッドライト……雨に濡れたアスファルトに反射する光が美しかった。初秋に残る暑さは和らぎ、頬を撫でる風がひんやりと心地良い。
「悪くないな」
こうして季節は次に移ろっていくんだな。降り注ぐ雨を眺めながら、海斗はそんなことを思った。